

クラゲを飼おう！

金 洋太

下村脩さんが2008年に緑色蛍光蛋白質（GFP）の発見と開発の功績からノーベル化学賞を受賞したことや、山形県に加茂水族館がクラゲの展示数世界一になるなど、昨今クラゲが話題となっている。クラゲと言えばミズクラゲを想像する人が多いが、日本沿岸には600種類近くが確認されており、1年を通して大小様々なクラゲを見ることができる。宮城の海でも様々なクラゲが生息しており、飼育することができる。

○クラゲの採集方法

四季を通して何かしらのクラゲが海にいますが、おすすめは春の海にいるクラゲである。比較的小型で刺胞毒も弱い種類が多い他、個体数が圧倒的に多く見られる。春の松島～塩竈周辺の海ではミズクラゲのエフィラ、シミコクラゲ、サルシアクラゲ、シロクラゲ、ドフラインクラゲ、カミクラゲ（これは大きめ）といった多数のクラゲを見ることができる。

クラゲは浮遊性のプランクトンであり、潮の流れに乗って移動する生き物である。よって、ほとんどのクラゲはフィールドにおいて自力で移動できず、漁港などの窪地に流れ込み、ゴミなどと一緒に溜まっていることが多い。そのため、クラゲの採集は漁港周辺（ヨットハーバーなど）で行うことが得策である。

採集に使う道具として最低限、網（目の細かいもの）、海水を汲む紐付きバケツ、フタ付きのタッパー容器（複数）、クーラーボックス（保冷剤）があればよい。クラゲを網ですくい、海水を入れたタッパー容器に入れるだけである。このとき、クラゲの傘を傷つけないように慎重に行うことが重要である。また、高密度で入れるとクラゲが弱ってしまうので、かなりの余裕

をもって入れることをおすすめする。最後に、換水用の海水をペットボトルなどに汲んでおくのも良い。

○クラゲの飼育

飼育には様々な方法があり、水槽やビーカー等の流水環境で飼う方法もあるが、今回はタッパー容器（止水）で飼育する方法を紹介する。まずクラゲの飼育には海水とエサが必要である。海水は汲んできたものや市販の人工海水を用いる。エサは市販のブラインシュリンプを孵化させたものを与える。換水する際は、新しいタッパー容器に海水を入れ、そこにクラゲを傷つけないように慎重に移す。基本的には毎日換水した方がよい。特にエサを与えた後は海水が汚れるので、必ず換水が必要である。エサは毎日与える必要はない。飼育に慣れていない場合は、特にエサを与えずに換水を行っているだけの方が長く生かせる場合が多い。飼育環境は、クラゲによって適温が異なるが、春のクラゲであればその時期の気温が10～15℃程度なので、室温に置いておくだけでよい。また、直射日光は避けて日陰に置いておくようにする。夏場や冬場のクラゲの適温を室温で維持するのは難しいが、上手に飼えば長生きさせられるかもしれない。

※クラゲは有性生殖と無性生殖を繰り返しており、海に浮いているクラゲは子孫を残すために産まれた有性生殖の形である。そのためフィールドにおいても寿命はそこまで長くはない。飼育する場合は数週間もてば良い方である。

参考文献

- 出口竜作・伊藤貴洋（2005）. エダアシクラゲの採集とライフサイクルの制御. 宮城教育大学紀要.
- 出口竜作・青木瞳・松田聖・佐藤英樹（2008）. エダアシクラゲの放卵・放精の光条件. 宮城教育大学紀要.
- 並河洋・楚山勇（2000）. クラゲガイドブック. TBSブリタニカ.